

NICU に入院した子どもの母親の対児感情と母性意識の変化と特徴 —入院時から退院後1年間における変化と満期産児の母親との比較—

山本美佐子¹⁾ 水島 禮子²⁾ 堀込 和代³⁾ 木浪智佳子¹⁾ 萬 美奈子¹⁾ 三国 久美¹⁾

- 1) 北海道医療大学 看護福祉学部 看護学科
2) 大宮医師会看護専門学校
3) 群馬県立県民健康科学大学 生涯発達看護学教育研究分野

【要旨】

本研究の目的は、NICU に入院した子ども（以下 NICU 児）の母親の対児感情と母性意識の入院中から退院後1年間の経時的変化と、満期産児の母親との比較による特徴を明らかにすることである。接近と回避の下位尺度から成る対児感情評定尺度と育児肯定、育児否定、葛藤、成長志向から成る母性意識尺度を用い、入院中・退院後3ヶ月前後・退院後1年前後の調査を行った結果、以下のことが明らかになった。

- 1) 子どもへの接近は、入院中は満期産の母親よりも有意に低く、在胎週数と正の相関が見られたが、退院後は増加し1年後には在胎週数による相関も、満期産との差も見られなくなった。
- 2) 成長志向得点は入院中満期産と比較し有意に低く、退院後は職業との相関が見られた。育児肯定得点は入院中のみ初産の NICU 児の母親が有意に低かった。

NICU に入院する子どもの母親には、特に入院初期、初産で在胎週数が少ないほど母親のこころの回復過程を見守りながら、母子の相互交流を手助けする看護の重要性が確認された。

キーワード

NICU 母性愛着 対児感情 母性意識

I はじめに

子どもの発達の基盤となる愛着 (attachment) の概念がボウルビィにより提唱されて以来、現在では乳児に限らず親から子ども、あるいは人と人との間で形成される愛情と愛情行動を含めた絆として、様々な領域で研究が進められている。そして、この愛着形成の障害が育児困難や虐待の一つの要因となる¹⁾ことは周知のことである。親子の関係性は経時的に発達の变化を遂げる。現在では母子分離すなわち愛着形成不全につながるとは一義的には言われないが、NICU に入院する子どもの母親（以後 NICU 児の母親）が、子どもへの愛着や親子関係を形成するには不利な状況にあることは明白な事実である。

NICU に入院する子どもを出産するという事は、予期せぬ出産による妊娠の中断、出産直後からの長期の母子分離、子どものハイリスク状態（生命の危機や後障害など）等により母親が危機的状況に陥ることもつながる。そして、この様な危機的状況が親子の愛着形成障害の要因となり育児困難や虐待に繋がること

が指摘されている²⁾。

今日の NICU では、ファミリーケアの重要性が認識され、面会の自由化やタッチング、カンガルーケア^{3) 4)}や養育の参加などが親子の愛着形成に対する効果的な援助として実施されている。また、看護領域での愛着形成に関する研究も行われており、愛着を測定する愛着尺度を使用したもの⁵⁾や、愛着を構成する要素と考えられている花沢⁶⁾の対児感情・母性意識や大日向⁷⁾の母性意識の評定尺度を用いたもの、面接と質問紙を併用したもの⁸⁾がある。愛着形成に関する研究の対象は正期産児の母親⁹⁾が多いが NICU 児の母親¹⁰⁾の研究もみられる。縦断研究や NICU 児の母親と比較した研究^{11) 12)}もみられるが多くはない。

繁多¹³⁾は、母性意識の構成要素として育児否定と育児肯定に加え、近年の女性の社会進出や高学歴化など社会構造の変化を考慮し、社会的志向（社会における自己）と現実（育児）とのギャップに重点を置いた葛藤と成長志向の下位尺度を用い、母性意識（特に葛藤）と母性感情（対児感情）が子どもの愛着の発達に及ぼす影響を研究し、葛藤が愛着形成に影響することを示唆した。

今回の研究は、繁多¹³⁾の研究で用いられた対児感情と母性意識の尺度を使用し、NICU に入院した子どもの母親の対児感情と母性意識が退院後1年を経てど

<連絡先>

石狩郡当別町金沢 1757
北海道医療大学 看護福祉学部
看護学科 母子看護学講座

のように変化するのか、また、満期産児の母親との比較を通してどのような特徴がみられるのかを明らかにすることを目的とした。

II 研究方法

1. 対象者と調査期間

調査対象は、A 県の2つの総合病院で満期出産した母親とB 県の小児専門病院NICUに入院した児(NICU 児)の母親である。調査期間は、1999年6月～2002年6月であった。

2. 調査方法

1) NICU 児の母親

本研究の共同研究者であるNICU スタッフが調査主旨の説明と協力の依頼を行い、承諾が得られた母親103名に自記式調査紙を配布した。回収と退院後の調査は、郵送法で行った。調査は、1回目(入院中)、2回目(退院後3ヶ月頃)、3回目(退院後1年前後)の3回実施した。なお、先天奇形、染色体異常、重症仮死の児の母親は本研究対象から除いた。

2) 満期産の母親

満期産児の母親120名を対象者とし、退院日に産科病棟看護師長が調査主旨の説明と協力の依頼を行い、承諾が得られた場合に自記式調査紙を配布・回収した。2回目以降の調査は、児の月齢が1ヶ月、3ヶ月、8ヶ月、12ヶ月になった時期に郵送法により自記式調査紙の配布・回収を行った。

3. 調査項目

1) 基本属性

母親の属性(年齢、出産回数、職業の有無)、子どもの出生体重、在胎週数と入院日数(NICU 児のみ)、家族形態について尋ねた。

2) 使用した尺度

花沢⁶⁾が作成した対児感情を測定する項目から18項目(表1)の尺度と大日向⁷⁾の母親役割意識を測定する尺度をもとに繁多¹³⁾が作成した母性意識16項目(表2)の尺度を使用した。対児感情は、接近(11項目)と回避(8項目)の2下位尺度で構成されており、「全くそのとおり(4点)」から「あてはまらない(1点)」までの4段階で回答を得て得点化した。母性意識は、育児肯定(5項目)、育児否定(3項目)、葛藤(5項目)、成長志向(3項目)の4下位尺度で構成され、「全くそのとおり(6点)」から「全くあてはまらない(1点)」までの6段階で回答を得た。なお、各尺度の信頼性を確認するために本研究対象者のデータを元にCronbachの α 係数を求めたところ、対児感情の下位尺度では接近が0.932、回避が0.720であり、母性意識の下位尺度では育児肯定が0.859、育児否定が0.554、葛藤が0.854、成長志向が0.519であった。

4. 分析方法

1) 分析に用いた対象者のデータ

NICU 児の母親と比較するため、満期産児の母親から収集した5時点のデータのうち、NICU 児と月齢の近い退院時、3ヶ月、12ヶ月の3時点のデータを選択した。これらのデータをNICU 児の1回目(入院中)、2回目(退院後3ヶ月頃)、3回目(退院後1年)のデータとそれぞれ比較した。なお、3時点とも有効回答が得られたのは、NICU 児の母親で33名(32.0%)、満期産児の母親で56名(46.7%)であった。

2) 分析方法

分析には、統計解析ソフトSPSS 13.0を用いた。対児感情と母性意識の3時点の変化には反復測定分散分析、NICU 児と満期産児の母親の対児感情・母性意識の比較にはMann-Whitney検定を用いた。対児感情と母性意識の相関関係を検討するために、Spearman相関係数を算出した。また、基本属性と対児感情、母性意識の関連をみるために、変数に応じ、Spearman相関係数の算出あるいはMann-Whitney検定を行った。

5. 倫理的配慮

郵送法による縦断的調査を行うため、研究協力の依頼時に研究目的・主旨と合わせて住所と氏名の記入が必要であることを説明し、同意が得られた母親を対象者とした。論文作成時には統計処理を行うため個人名は特定されないことも説明した。なお返信がない場合は研究参加拒否又は中断の意思表示と捉え、次回からの配布は中止した。

表1 対児感情の設問項目

あなたのお子さんについて現在あなたがどのように感じているか、それぞれの項目について当てはまる番号*を○で囲んでください。	
1) あたたかい	10) じれったい
2) やかましい	11) うっとうしい
3) うれしい	12) うつくしい
4) すがすがしい	13) めんどくさい
5) むずかしい	14) たのしい
6) ほほえましい	15) みずみずしい
7) ういういしい	16) こわい
8) わずらわしい	17) やさしい
9) あかるい	18) すばらしい
*4: 全くそのとおり 3: そのとおり 2: 少しそのとおり 1: あてはまらない 接近(11項目): 1) 3) 4) 6) 7) 9) 12) 14) 15) 17) 18) 回避(7項目): 上記以外の項目	

表2 母性意識の設問項目

あなたの今の気持ちについてお聞きします。 それぞれの項目について当てはまる番号*を○で囲んでください。	
1) 母親であることが好きである	
2) 自分の関心が子どもにばかり向いて視野が狭くなるのを感じる	
3) 母親であることに生き甲斐を感じている	
4) 夫や子ども中心の生き方ではなく、自分中心のライフワークを持ちたい	
5) 子どもは産まないほうがよかった	
6) 母親になったことで気持ちが落ち着いた	
7) 自分は母親としてふさわしくないのではないだろうか	
8) 母親になったことで人間的に成長できた	
9) 子どもを育てることが負担に感じられる	
10) 子どもがいるために自分のやりたいことができなくて焦る	
11) 母親として振る舞っているときが一番自分らしい	
12) 育児にたずさわっている間に世の中から取り残されていくように思う	
13) 母親であるために自分の行動がかなり制限されている	
14) 自分の一生は、このままでは育児に追われて終わってしまうのではないかと不安に思う	
15) 母親であることに充実感を覚える	
16) 育児に専念するばかりでなく、もっと自分の能力を生かしたい	
*6:全くそのとおり 5:そのとおり 4:少しそのとおり 3:あまりそうでない 2:そうでない 1:全くそうでない 育児肯定(5項目):1) 3) 6) 11) 15) 育児否定(3項目):5) 7) 9) 葛藤(5項目):2) 10) 12) 13) 14) 成長志向(3項目):4) 8) 16)	

IV 結果

1. 対象者の属性

母親の年齢は、20代がNICU児の母親で51.4%、満期産児の母親で53.1%であった。出産回数では、初産がNICU児の母親で60.5%、満期産児の母親で43.2%であった。専業主婦の割合は、NICU児の母親で80.0%、満期産の母親で77.8%であった。

NICU児の体重は、平均 1437.8 ± 660.2 gであり、在胎週数は平均 30.3 ± 4.5 週、入院日数の平均は、 82.6 ± 43.5 日(中央値69日)であった。満期産児の出生体重は、3000~3500gが42.0%、2500~3000gが34.6%であった。

家族形態は、NICU児では核家族が81.4%、満期産児では84.0%であった。

2. 基本属性と対児感情・母性意識の関連

NICU児の母親の職業の有無と対児感情・母性意識の関連をみたところ、有職の母親は無職の母親よりも2回目(退院後3ヶ月頃)および3回目(退院後1年)の成長志向得点が有意に高かった。一方、満期産児の母親では職業の有無と対児感情・母性意識の関連はみられなかった。また、NICU児の経産の母親は初産の母親よりも1回目(入院中)の育児肯定得点が有意に高く、初産の母親は経産の母親よりも2回目(退院後3ヶ月頃)の回避得点が有意に高かった。満期産児の母親では、初産の母親は経産の母親よりも1回目(退院時)および2回目(3ヶ月)の回避得点が有意に高かった。NICU児および満期産児の母親の家族形態と対児感情・母性意識の関連はみられなかった。

さらに、NICU児の在胎週数は、1回目(入院中)の調査のみ対児感情の接近と正の相関がみられた。い

ずれの調査においても、児の出生体重、母親の年齢と対児感情・母性意識の関連はみられなかった。

3. NICU児と満期産児の母親の対児感情および母性意識の3時点の変化

3時点のデータが得られたNICU児(33名)と満期産児(56名)の母親の対児感情および母性意識の得点の平均値を図1に示した。

NICU児および満期産児の母親の対児感情の変化をみたところ、NICU児の母親の接近は2回目調査(退院後3ヶ月頃)が最も高く、満期産児の母親の接近は時間とともに有意に増加した。回避はいずれの母親においても有意な変化はみられなかった。また、母性意識の変化をみたところ、いずれの児の母親においても葛藤と成長志向の得点は時間とともに有意に増加した。満期産児の母親の育児否定の得点は、1回目(退院時)が最も高く、その後減少した。

4. NICU児と満期産児の母親の対児感情および母性意識の比較

1~3回目の調査で得られた対児感情および母性意識のそれぞれの下位尺度について、NICU児と満期産児の母親の得点を比較した(表3)。1回目の調査においてのみ、NICU児と満期産児の母親で有意差がみられ、対児感情の接近、母性意識の成長志向の得点がNICU児の母親で低かった。さらに単項目で比較したところ、NICU児の母親が有意に低かったのは接近項目では「あたたかい」「すがすがしい」「ほほえましい」「あかるい」「たのしい」「みずみずしい」であり、成長志向項目では「夫や子ども中心の生き方ではなく、自分自身のライフワークを持ちたい」であった。

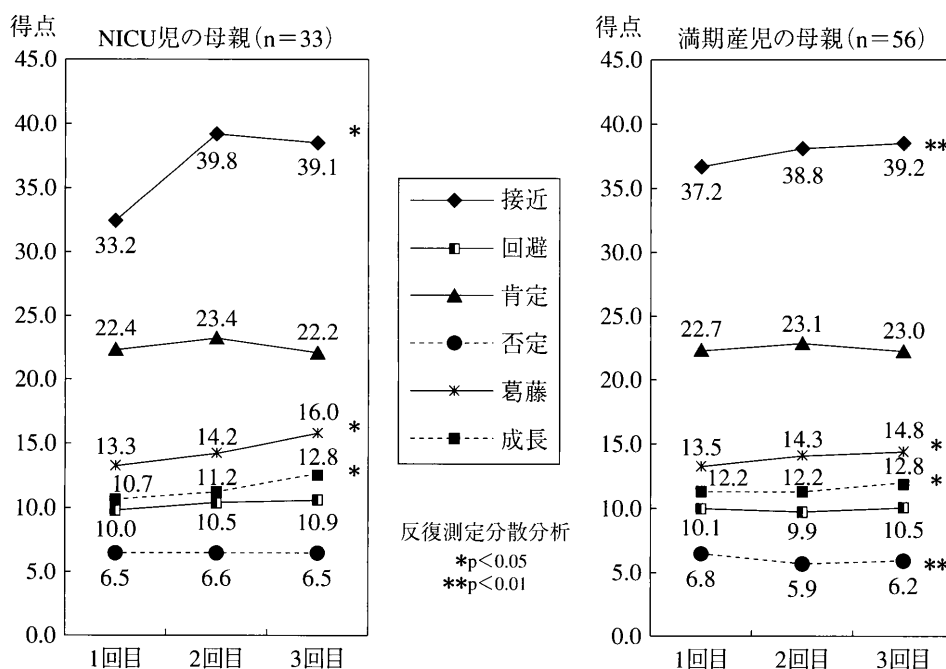


図1 NICU 児の母親と満期産児の母親の対児感情と母性意識

表3 NICU 児と満期産児の母親の対児感情および母性意識の比較

下位尺度	1回目		2回目		3回目	
	NICU 児 n=89	満期産児 n=81	NICU 児 n=65	満期産児 n=69	NICU 児 n=35	満期産児 n=56
対児感情						
接近感情	33.4±8.5	36.9±5.4*	39.5±4.9	38.4±4.9	39.2±5.1	39.2±4.7
回避感情	10.0±2.5	10.4±3.0	10.9±3.2	10.1±3.1	10.8±2.8	10.5±3.1
母性意識						
育児肯定	22.9±4.3	23.0±4.1	23.3±4.0	23.0±4.5	21.8±5.1	23.0±4.3
育児否定	6.1±2.6	6.5±2.3	6.2±1.9	6.2±2.6	6.5±2.5	6.2±2.1
葛藤	12.1±5.3	13.0±4.6	13.9±5.4	14.1±5.3	16.2±5.8	14.8±5.5
成長志向	10.6±2.4	11.8±2.3**	11.2±3.1	11.9±2.3	12.9±3.1	12.8±2.3

(平均得点±標準偏差)

Mann-Whitney 検定による NICU 児の母親と満期産児の母親の得点差 *p < 0.05 **p < 0.01

5. 対児感情と母性意識の相関

NICU 児および満期産児の母親のそれぞれについて、対児感情と母性意識の相関係数を算出したところ、NICU 児と満期産児の母親のいずれにも共通した結果が得られた (表4)。すなわち、いずれの母親についても3回分全ての調査で対児感情の回避得点と母性意識の育児否定得点・葛藤得点で正の相関がみられた。また全ての調査ではないものの、対児感情の接近得点と母性意識の育児肯定得点には正の相関が、対児感情の接近得点と母性意識の育児否定得点・葛藤得点には負の相関が、対児感情の回避得点と母性意識の育児肯定得点には負の相関がみられた。さらに母性意識の下位尺度間の相関をみたところ、いずれの母親についても3回分全ての調査で育児否定得点と葛藤得点、葛藤得点と成長志向得点には正の相関がみられた (表5)。

表4 対児感情と母性意識の下位尺度間の相関

対児感情		母性意識 (調査時期)		NICU 児の母親	満期産児の母親
接近	×	育児肯定	(1回目)	0.573**	0.538**
接近	×	育児肯定	(2回目)	0.503**	0.572**
接近	×	育児肯定	(3回目)	0.539**	0.262
接近	×	育児否定	(1回目)	-0.257*	-0.210
接近	×	育児否定	(2回目)	-0.377**	-0.342**
接近	×	育児否定	(3回目)	-0.420*	-0.201
接近	×	葛藤	(1回目)	-0.300**	-0.154
接近	×	葛藤	(2回目)	-0.353**	-0.305*
接近	×	葛藤	(3回目)	-0.201	-0.122
回避	×	育児肯定	(1回目)	-0.255*	-0.226*
回避	×	育児肯定	(2回目)	-0.458**	-0.339**
回避	×	育児肯定	(3回目)	-0.261	-0.392**
回避	×	育児否定	(1回目)	0.568**	0.374**
回避	×	育児否定	(2回目)	0.593**	0.607**
回避	×	育児否定	(3回目)	0.449**	0.655**
回避	×	葛藤	(1回目)	0.285**	0.314**
回避	×	葛藤	(2回目)	0.364**	0.538**
回避	×	葛藤	(3回目)	0.346*	0.496**

(Spearman 相関係数 * p<0.05 ** p<0.01)

NICU の母親：1回目 n=89 2回目 n=65 3回目 n=35
 満期産児の母親：1回目 n=81 2回目 n=69 3回目 n=56

表5 母性意識の下位尺度間の相関

母性意識の下位尺度 (調査時期)				NICU 児の母親	満期産児の母親
育児否定	×	葛藤	(1回目)	0.459**	0.639**
育児否定	×	葛藤	(2回目)	0.551**	0.395**
育児否定	×	葛藤	(3回目)	0.618**	0.566**
成長志向	×	葛藤	(1回目)	0.384**	0.501**
成長志向	×	葛藤	(2回目)	0.470**	0.447**
成長志向	×	葛藤	(3回目)	0.474**	0.302*

(Spearman 相関係数 * p<0.05 ** p<0.01)

NICU の母親：1回目 n=89 2回目 n=65 3回目 n=35
 満期産児の母親：1回目 n=81 2回目 n=69 3回目 n=56

V 考察

NICU 児の母親の子どもへの愛着形成を構成する要素として、母性意識と対児感情の尺度を用い縦断研究を行った。1年間の経時的変化および属性との関連を満期産児の母親と比較し、いくつかの特徴と看護への示唆を得たので考察する。

1. 対児感情の変化と特徴

NICU 児の母親の対児感情の特徴は、接近感情の経時的変化および入院中の満期産児の母親との有意差や在胎週数との正の相関にみられ、回避感情は出産経験との正の相関にみられた。

NICU 児・満期産児の母親いずれにも入院中から退院後3ヶ月にかけて接近感情の有意な増加がみられ、その後1年頃までほぼ同じレベルを維持していることがわかった。これは、正常産の母親を対象とした大村ら¹²⁾の研究結果である「母親の子どもへの愛着得点は妊娠期から生後3ヶ月にかけて有意に高まりその後一定のレベルを維持していた」と同様の結果を示している。また、菅原¹⁴⁾は欧米の調査結果からも入院中では否定的な感情を持つ母親もいるが生後3ヶ月頃にはほぼ全員の母親が子どもへの強い愛着を示し、2ヶ月を過ぎても愛着を感じられない場合の関連要因を紹介している。本研究では、入院中のNICU 児の母親

の接近得点は満期産児の母親よりも有意に低かったがその後増加し、退院後3ヶ月頃には両者に有意な差がみられなくなった。NICU児の母親の接近得点は在胎週数との正の相関もみられたが、それは入院中のみで、退院後はみられなかった。これらのことから、児が入院中のNICU児の母親の接近感情は低い傾向にあるものの、退院後3ヶ月頃には満期産児の母親と同じレベルに到達できる母親が多いことが伺えた。

筆者らの一部が以前実施した母性愛着の形成に関する研究¹⁵⁾での早期産児(在胎28週~30週)の母親の面接調査でも、出産間もない時期の母親は、我が子だという実感がもてず、驚き・罪悪感・憐憫などの感情を強く表出していた。妊娠の中断により、突然母親となってしまったことへの戸惑いや自分自身の身体への違和感と不調、子どもへの罪悪感や子どもの現実の姿への衝撃などが勝り、母親としての役割や社会における自分の存在など意識に昇る余裕はなかったことが語られていた。しかし、面会を重ね子どもが懸命に‘頑張っている’姿を見、‘生きている’子どもを感じ、自分自身のこころが落ち着くにしたがい、我が子としての実感が強まっていった。その後は子どもに触れる・抱く等の接触を通しての相互作用を経て、ますます母親としての実感や可愛いと思える気持ちが強まっていった。

満期産児の母親より有意に低かったNICU児の母親の対児感情の単項目が「ほほえましい」「たのしい」などであったことは、前述した研究で面接した母親の語りにもみられたような小さすぎて医療器具に囲まれ痛々しい状況にある子どもへの感情としては当然といえるであろう。NICU入院初期に対児感情の接近が低くても、時間の経過により増加するのは自然な変化と考える。看護師は、この様な状況下にある母親自身が、自分の気持ちの混乱を収集し落ち着くまで、積極的に何か行動レベルを要求したり、励ましたりするのではなく、じっと見守り、待つことが大切だと言える。橋本¹⁶⁾は「何もせず自然の過程を支えてゆく」ことがこの時期の基本となるケアであると述べている。子どもとの接触などの行動レベルも、母親のこころの回復に合わせて段階を経て進めていくことが大事である。

一方、回避得点は入院中に高く、退院後減少するのではないかと予測したが、実際は有意な変化はなく満期産児の母親との差も認められなかった。NICU児および満期産児いずれの母親においても初産の母親は経産の母親よりも回避得点が高い結果が出たことから、母親自身の育児経験が回避感情に影響を及ぼすことが推測された。

核家族はNICU児および満期産児いずれも8割に達しており、核家族化の進行を現しているが、今回の調査では家族形態の違いによる対児感情には有意差はみられなかった。同様に、大村¹²⁾らの研究でも出産後

の愛着と職業の有無の相関はみられなかった。

2. 母性意識の変化と特徴

母性意識について、NICU児・満期産児いずれの母親も育児肯定得点に有意な変化はみられないが、葛藤得点と成長志向得点は有意に増加した。また、NICU児の母親の母性意識の特徴として、入院中の成長志向得点が満期産児の母親よりも有意に低いことがあげられる。2回目以降の調査では、対象者数の減少が検定結果に影響した可能性もあるもののNICU児の母親と満期産児の母親に差はみられなかった。このことからNICUに入院するという危機的な状況は、母親の成長志向を低めるが家庭での実際の育児体験を重ねることにより、高まることが推察できる。

NICU児と満期産児いずれの母親も3回ともに葛藤得点と成長志向得点に正の相関がみられたことから、葛藤と成長志向は相互に影響を及ぼし、成長志向が高くなると社会的志向と育児の現実との葛藤も強まることが伺える。また、葛藤は育児否定と正の相関がみられるが、成長志向および育児否定との相関はみられなかった。このことから葛藤が強いと育児否定の意識は強まるが、成長志向は必ずしも育児否定につながらないことが考えられる。

有職のNICU児の母親の退院後3ヶ月頃と1年目頃の成長志向得点が有意に高い結果と、初産の母親の入院中の育児肯定得点が有意に低い結果も特徴としてあげられる。NICU児の母親は、退院後も子どもの発達や後障害のフォローのための通院や育児上の特別な配慮などで行動レベル、意識レベルにおいて余裕がないことが推察されるが、そのような中でも職業を持つことを選択する母親は、成長志向の高い傾向にあることがわかる。職業を持つNICU児の母親には家族や職場等の理解と協力が、より必要とされるであろう。また、入院中の初産のNICU児の母親のみ育児肯定が低いのは、初めての出産がこの様な危機的状況であった上に、子どものハイリスク状況が未体験の通常の育児への不安に加わり、育児否定を高める結果になったのではないだろうか。しかし、退院後は有意差がみられなくなることから、特にNICU児の初産の母親に対しては回復していく可能性を踏まえて見守ることが大切であると思われた。

3. 対児感情と母性意識の関係

本研究結果で対児感情と母性意識の関係を見ると、NICU児と満期産児の母親いずれも同様の傾向がみられた。調査の回を重ねるごとに対象者数が減少し、特に退院後1年の3回目調査ではその影響を受けて有意差がみられなくなる下位尺度がいくつかあったものの、総じて正負の向きが変わることはなかった。

つまり、子どもに対するプラス面の感情である接近

が高いと育児肯定が高く、マイナス面である回避が高いと育児否定や葛藤が高いなど相互に影響を及ぼしあっていると見える。しかし、成長志向に関しては対児感情との有意な相関がみられなかったことから、母親が自らの成長を志向する意識と子どもへの感情は影響を及ぼし合うことは少ないと考える。

VI まとめ

本研究では、対児感情と母性意識の経時的変化と特徴を明らかにし、NICUに入院を余儀なくされた子どもの母親への愛着形成を手助けするための看護を考える上でいくつかの示唆を得た。NICUでは、今回対象となった病院も含め、母親だけでなく父親や母子を取りまく家族を含めたファミリーケアの介入が積極的に推進されている。今回の結果から、特に入院初期、初産で在胎週数が少ないほど、母親のこころの回復過程を見守りながら母子の相互交流を手助けする看護の重要性が確認された。

謝辞

本研究にあたり、調査に快くご協力くださいましたお母様方と各病院関係者に深謝いたします。

引用・参考文献

- 1) 内山絢子. 調査報告から見たわが国の児童虐待の実態と今後の課題. 子ども社会学研究 1997; 3: 29-43.
- 2) Marshall.H.Klaus, John.H.Kennell 1979. 竹内徹・柏木哲夫訳. 親と子のきずな, 医学書院, 東京, 1985年, pp 221-333.
- 3) 笹本優佳, 橋本洋子, 正木宏他. カンガルーケアが早産の母子の行動, 関係性発達におよぼす効果について. 小児保健研究 1998; 57 (6): 809-816.
- 4) 中島登美子. カンガルーケアを実施する母親の体験. 看護研究 1999; 32 (5): 57-65.
- 5) 太田にわ. 日本版 MAI 尺度による母性愛着の評価と関連要因に関する研究—第1報. 日本小児科学会雑誌 2001; 105 (8): 867-875.
- 6) 花沢成一. 母性心理学, 医学書院, 東京, 1992年, pp 65-70.
- 7) 大日向雅美. 母性の研究—その形成と変容の過程: 伝統的母性観への反証—, 川島書店, 東京, 1988年, pp 135-169.
- 8) 炭谷靖子, 成瀬優知. 3・4ヶ月乳児集団検診前後の母親としての自信と対児感情の変化に関する要因. 母性衛生 2005; 46 (2): 310-319.
- 9) 原田真由美. 極低出生体重児の母親の愛着形成過程とその関連要因, 日本新生児学会誌 2001; 18 (1): 20-31.
- 10) 木戸久美子, 内山和美. NICUを退院した児を抱

える母親の対児感情に関する実証的研究. 母性衛生 1998; 39 (1): 114-119.

- 11) 下田あい子, 戸部和代, 今関節子他. NICUに入院した児の母親と正常分娩をした母親の不安・愛着の比較. 日本新生児看護学会誌 2001; 18 (2): 45-52.
- 12) 大村典子, 光岡攝子. 妊娠期から生後1年までの児に対する母親の愛着とその経時的変化に影響する要因. 小児保健研究 2006; 65 (6): 733-739.
- 13) 繁多進, 松下美貴子. 母親の母性と子どものアタッチメントの発達. 母子研究 1984; No 7: 44-57.
- 14) 菅原ますみ. 母親の子どもに対する愛着—マタernalアタッチメントの発達—. 小児看護 1989; 12 (4): 409-408.
- 15) 山本美佐子, 水島禮子. 早産の母親の母性アタッチメント形成に関する研究—初期の母親感情の変化—. 群馬県立医療短期大学紀要 1998; 5: 43-53.
- 16) 橋本洋子. 新生児集中治療室 (NICU)における親と子へのこころのケア. こころの科学 1996; 66: 27-31.

受付: 2006年11月30日

受理: 2007年1月30日

Changes and characteristics of maternal consciousness and feelings toward babies among mothers of infants admitted to Neonatal Intensive Care Unit : A comparison of mothers of full-term infants from the time of hospitalization to one year after discharge

Misako Yamamoto¹⁾, Reiko Mizushima²⁾, Kazuyo Horigome³⁾, Tikako Kinami¹⁾, Minako Yorozu¹⁾, Kumi Mikuni¹⁾

1) School of Nursing and Social Service, Health University of Hokkaido

2) Omiya Medical Association

3) Gunma Prefectural College of Health Sciences

Abstract

The aim of this study was to determine changes in maternal consciousness and feelings toward babies admitted to Neonatal Intensive Care Unit (NICU), and to compare their characteristics with mothers who had given birth to full-term infants. Two scales were used in this study : (1) a rating scale of feelings toward babies based on a measurement of approach and avoidance, and (2) a maternal consciousness scale that measured infant care, childcare rejection, complications, and growth. Data was collected three times : during hospitalization, three months after discharge, and one year after discharge.

- 1) Mothers of NICU infants were significantly less likely to approach their infants during hospitalization than mothers of full-term infant births with a positive correlation with the number of weeks of pregnancy lacking for a full-term birth. However, after hospital discharge, the degree to which mothers of NICU infants approached their infants increased. After one year, there was no correlation with weeks of pregnancy, and the previous difference with full-term infant births became indistinguishable.
- 2) Growth scores for NICU infants of mothers who had been discharged were significantly lower when compared with those during hospitalization. Furthermore, a correlation between infant growth and employment was found among mothers after hospital discharge. Infant care scores of mothers of NICU infants were significantly lower for mothers who were having their first child.

For mothers of infants admitted to NICU, especially for mothers giving birth for the first time or being hospitalized for the first time, it is important for nurses to encourage a mutual exchange between mother and infant while also ensuring that the mother recovers psychologically.